THE CHAIR OF HEALTH 124

# 医師会健康講座

## 虫垂炎と手術の美学

市立宇和島病院（御殿町）　今井　良典

今回は、みなさんも1度は聞いたことのある病気「急性虫垂炎」について解説します。知っているようで、実はよく知らない急性虫垂炎、どのようなイメージをもっていますか？急にお腹が痛くなるありふれた病気…、軽い場合は薬で散らす…、悪化すれば手術しなければならない…といったところでしょうか。俗に「盲腸」と言ったりもしますが、「盲腸になって緊急手術をした…」という方もたくさんいるのではないかと思います。5歳くらいの幼児から100歳を越える超高齢者まで誰にでも発症する可能性があり、珍しい病気ではありません。しかし、急にお腹が痛くなる病気は数多く存在し、実は診断の難しい疾患でもあり、「急性」の名のとおり早急に診断し、時期を逸しないように速やかに治療を開始することが必要とされます。代表的な症状は右下腹部痛ですが、みぞおち付近の痛みが初期症状である場合も多く、食欲不振、発熱といった風邪や胃腸炎に似た症状も認めるため、診断に苦慮することもあります。昔から「たかが盲腸、されど盲腸」などと言われ、手術のタイミングが遅れると腹部に大きな傷跡が残ったり、お腹の中に膿などが溜まる合併症を併発したり、最悪の場合は腹膜炎や敗血症をきたし重篤な状態となる恐れもあります。現在ではレントゲン検査の精密CT撮影を活用し速やかに診断ができるようになってきましたが、腹痛を我慢しすぎるあまり患者様自身の病院受診が遅れ、診断・治療開始が遅くなり、結果的に重症化する症例も少なくありません。

ごくありふれた病気だからこそ、正確に診断し、手際よく治療し、速やかに社会復帰を目指すことが求められますが、最新の虫垂炎治療には、さらに「美しくきれいに治す」という要望が加わってきました。虫垂炎は10～20歳代の若年発症も多く、特に若い女性ではできるだけ目立たない傷での手術が望まれます。そこで、当院では最新虫垂炎治療として2011年より「単孔式腹腔鏡下虫垂切除術」を開始しました。「単孔式」とは、ヒトには必ず存在する『凹み』であるおへソに小さな孔をあけて行う手術を意味します。従来は右下腹部を5㎝程度切開し手術を行っていましたが、この「単孔式腹腔鏡下虫垂切除術」ではおへソの凹みの中だけを約1～2㎝程度切開し、腹腔鏡と呼ばれる細長いカメラ（内視鏡）を挿入し、炎症を起こしている虫垂を切除します。おへソの中の傷は全く目立たず、手術をした形跡すら残らないこともあります。さらに、腹腔鏡でお腹全体を観察できるため、腹痛の原因となるほかの病気の鑑別が可能です。特に女性では婦人科関連疾患がないかどうかを判断することができるという利点もあります。愛媛県では当院が初の導入となった「単孔式腹腔鏡下虫垂切除術」ですが、全国でも徐々に広がりつつあります。小児や若年の患者様を中心にこの手術を行い、多くの方々に喜ばれていますが、すべての虫垂炎の方に施行できる訳ではありません。炎症がひどくならないうちにできるだけ早く虫垂炎と診断することが条件です。早期診断早期治療のためにも、急な腹痛を自覚し、もしかして盲腸？と思ったら、早めに医療機関を受診しましょう。

虫垂炎に限ったことではありませんが、最新の外科手術には安全確実かつ美しくきれいに治すことが求められています。外科治療には縁遠いと思っていた美容や整容性に対する関心が徐々に高まる中、当院ではその要望にお答えするべく最新手術で対応しています。ご興味のある方はお気軽にご相談ください。